様式第２号

会　　議　　録

会議の名称	令和８年度（2026 年度）第１回豊中市立図書館協議会			
開催日時	令和８年（2026）７月 31 日（金曜）15 時～17 時			
開催場所	地域共生センター２階大会議室		公開の可否	(可)・不可・一部不可
事務局	読書振興課　岡町図書館		傍聴者数	７人
公開しなかった理由				
出席者	委員（敬称略）	福井　佑介　　山本晃輔　　森　美由紀　　藤井　典子　　樋口　弘子　　昇　麗子 中　和久　　田辺　譲　　杉本　光子		
	事務局	佐野読書振興課長　西口岡町図書館長　青木庄内図書館長　山根千里図書館長　小堀野畑図書館長　山根岡町図書館副館長　橋爪読書振興課長補佐、長坂読書振興課副主幹　芝読書振興課職員		
	その他			
議題	１　本のあるまちづくりの推進について（諮問） ２　その他			
審議等の概要（主な発言要	別紙のとおり			

令和８年度（2026 年度）　第１回図書館協議会

・図書館長から委員長へ諮問書の手渡し

□議題１「本のあるまちづくりの推進について」

（事務局説明）

諮問に至った背景や理由、本のあるまちづくりに向けた現状の課題意識やめざすべきまちの姿、市立図書館の役割（これまでの実践と今後の課題等）や今後の方向性などについて、主に【資料１】、【資料２】に沿って説明。

（委員長）
・ただいまの事務局の説明に対し、委員から質問等をいただきたいと思います。

(委員)
・市民意見交換会の開催時間が固定化され、偏っている。もっと多くの幅広い世代の方が聞きにくることのできる時間設定にしてほしい。アンケートも幅広く世代を意識して実施したほうがよいのではないか

（委員）
・普段から小学生のこどもたちと接しているが、子どもたちの本離れ、読書離れは確かに進んでいるように感じる。今回こうした「本のあるまちづくり」という方向性を提示いただいたことについては感謝している。とはいえ、この先、どうなっていくのか見えない部分はたくさんある。

（委員）
・中学校の子どもたちも、読書をほとんどしない、いわゆる不読者は多くいると感じている。各中学校には学校図書館があり、それぞれにイベントや行事をしているが、中学校同士の情報共有ができていない部分がある。中学生の本離れをくいとめたい思いは強い。

（委員）
・こども園に勤務しているが、「本を介してつながる」というテーマ自体はすごく良いと思う。園でも絵本をいろいろなところで使っており、子どもたちの遊びや、親子のふれあいにつながっている。本と出合うことは大切。図書館を利用したことがない人が多いのはとても残念だ。園にも絵本コーナーがある。時間はないけれど、帰りのちょっとしたときに、迎えに来た保護者の方が子どもたちに絵本を読んであげている。このように本が身近にあるのは意味のあること。なかなか足が向かないことも多いと思うが、どこかに出向くという視点を持ってもらえたら。

（委員）
・今回のテーマには肯定的な印象を持っている。ただ、これから２年間にわたり議論をしていくにあたり、やはり中央図書館についてのしっかりとした議論がないと、リアリティのない抽象的な議論になってしまう。核となる真ん中のピースが埋まらない感じ。

・中央図書館の整備に関してはっきりしないことを問題にしているわけではないので適時開示をしてほしい。
・各館の方向性に関して示されている計画は中央館の整備に活かされる計画であると理解している。計画は「施設としてこうありたい」という考え方をもとに立案し、検証すべきであると思う。螢池図書館リニューアル等の先行計画によって得た成果や課題を、きちんと検証したうえで、高川図書館や野畑図書館等に活かしていく必要がある。将来的には本館機能をもつ岡町図書館でも検証結果に基づいて実証実験的なことを実施してほしい。

（委員）
・これまでこの協議会で地域の図書館のことを話し合うことがほとんどなかったが、やっと地域の図書館の方向性を議論できる機会ができたことは良かったと思う。そのうえで、中央図書館と地域図書館をともに議論し、より良いネットワークが作られることを期待している。とくに地域の図書館の役割をきちんと考えていくことが大切だ。子どもたちにとっても歩いて行けるところにある地域の図書館の機能がないがしろにされないようにしていかなければならない。
・各館の蔵書構成についても議論していきたい。今は野畑に大きな書庫があるが、今後の地域の図書館の蔵書構成をどうしていくのかは大切な問題だ。

（委員）
・【資料１】3 ページ左側にアンケート調査結果が示されている。図書館の効果として「他者との対話や交流のきっかけが生まれる」との回答は約 49%。「本を介して人がつながるまち」を目指す際の核心部分だが、その具体的方策等がこの資料には示されていない。
・3 ページ右側には全国のこどもたちの不読率を示すデータが示されているが、本市の状況はどうなのか。本市のこどもの読書活動はどのレベルなのか。それも示すべきではないのか。豊中市子ども読書活動推進計画などでアンケート調査していないのか。
・５ページの「本のあるまちづくり」の言葉は魅力的だが、内容があいまいで、単なるイベントの開催や本棚の設置で終わってしまうのではないかと懸念している。
・同じく５ページのイラストでは、いろんなセクターがでてくるが、学校図書館と市立図書館は切り分けて考えるべき。本来、公立図書館と学校図書館は目的と理念が異なる。公共図書館数を減らした分は、学校図書館を地域開放すればいいじゃないかという安易な発想に転換していくことを非常に懸念している。
・6 ページのビジョンの中身もよくわからない。これまでの中央図書館基本構想や図書館みらいプランのどの部分を、どのように変更し、強化したいのかを、はっきりさせないといけない。候補地が変更になり、方針変更が必要なのか。本来、今回の資料にはそれらが新旧対照表のようにして、きっちりと示され、今日の協議会で議論できるようにされているべきではないか。
・６ページには現行プラン等の時点修正のポイントが示されており、蔵書については、市立図書館全体で「100 万冊を維持する」との方針が示されているが、総量だけでなく、中央館・地域館・分館それぞれにどの程度の蔵書を配置し、どのような役割分担のもとで蔵書を構築していくのか、具体的な配分方針を示す必要がある。また、豊中市が将来的な蔵書規模を 100 万冊とすることが適切であるかについても、改めて検証が必要ではないか。北摂地域の他自治体では、豊中市より人口規模の小さい茨木市や、人口が同程度の高槻市において、130 万冊とより大きな蔵書規模となっている。北摂地域や全国の同規模自治体との比較ができる統計資料を提示した上で、豊中市にとって必要な蔵書規模を検討する必要がある。
・曽根駅前の商業施設の中では難しかったかもしれないが、豊島公園に建設される中央図書館には、中央図書館として将来にわたり資料を保存・継承するために書庫を確保しないといけない。

・候補地が変わると、規模や機能、サービスの在り方も変わる可能性もある。面積は 5,000 ㎡より大きくなるのか。施設規模なども含めて議論できる余地はあるのか。
・１２ページには、蔵書構成・資料整備などの話はなく、ゾーニングの話しか書いていない。どの館にどういったテーマやジャンルの資料を置き、どの程度蔵書スペースを確保するのかはとても大切な話だ。
・豊島公園に多機能複合施設を建設予定と記載されている。茨木市の「おにクル」は、中央図書館ではなく地域図書館。多機能複合施設の中に、市の中央図書館が入る意義はいったい何なのか。きちんとつめてほしい。なぜ中央図書館が必要なのかの議論や思いが事務局側から伝わってこない。
・また 12 ページで、庄内図書館の取組みのところに学校図書館の地域開放のトピックスを記載しているが、一緒に記載することはおかしい。学校図書館と公共図書館は違うので、ここは庄内図書館自身の取組み、例えば多文化共生に関わるサービスの強化や取組みであるとかを入れてほしい。
・服部図書館には「民設の情報ライブラリの拠点化」と示されている。森ノ宮や十三の「まちライブラリ」をイメージしているとのとであるが、「まちライブラリ」の本質はつながりであって、情報拠点ではない。公共図書館の本来の目的である情報アクセスを保証する理念とは全く別物だ。事実上の民間運営への転換の検討がさらっと書いてある。もっと市民と議論を深めていくべきところだと思う。
・高川図書館や服部図書館などの分館については、施設規模や収蔵能力の制約から、児童書と一般書を中心とした基本的な資料構成とならざるを得ない。一方、地域館については、児童書・一般書に加えて、ビジネス、多文化等の資料を配置することが可能とされているものの、それぞれの地域館が特定分野について特色ある資料を体系的・継続的に収集し、「コレクション」として形成していく方針までは明確に示されていない（或いは反映されていない）のではないか。それゆえ中央図書館は、地域館や分館の蔵書を補完する機能が求められる。専門書やレファレンス資料、地域資料をはじめ、利用頻度だけでは評価できない資料についても体系的かつ継続的に収集・保存し、市民の調査・研究や課題解決を支える中核的なコレクションを形成する必要がある。さらに障害者サービス、ICT、データベース、AI など。ゾーニングのことだけではなく、多様な資料整備についても一歩踏み込んで書いていく必要がある。
・「本のあるまちづくりの推進」では、市民が本に触れることのできるアクセスポイントを量的に増やしていくことについては示されているものの、各図書館がどのような特色や強みを持つ蔵書を形成していくのか、また専門職員である司書の知識やスキルを、それらの取組みにどのように生かしていくのかについては、全く触れていない。アクセスポイントを増やすこと自体は重要であるが、それだけでは公共図書館が担ってきた専門的な機能を代替することはできない。むしろ、図書館固有の機能が相対的に縮小していくことへの懸念がある。ジャンルやテーマの幅をどう確保していくか。中央図書館としてどのような資料を収集していくのかについての言及がもっとあってもよい。

（委員）
・あえて事務局に聞きたい。【資料１】１ページには「本が心を満たし、本を介して人がつながるまちをめざして」と謳っているが、なぜ本でなければならないのか。本である理由は何か。
・というのも、本を好きな人が集まって、本が好きな人だけがつながる話になってしまわないか。不読率が高くなっているということは、逆に言うと、本以外のものでつながった方がよいのでは（本を読まない人は、まちづくりに参加できないことにもなりかねないのでは）。私たちが掲げる中心的な理念であるので、事務局にはそのメッセージを言葉にしてもらいたい。
また、本を介して人がつながることは、誰と誰がつながることをイメージしているのか。これも事務局に聞きたい。

（事務局）

・本には可能性があり、力があると思っている。こども読書活動など、本を介してこれまでネットワークが広がってきた成功体験がある。それらを地域に、社会に広げていきたいという思いがある。
・自宅に本を所有する人も少なくなってきている。豊中市の調査でも示されている。こうした状況でもあるからこそ、「本のあるまちづくり」の取組みを進める意味はあると思う。
・本は誰もが手に取ることができ、幅広いもの。世代を選ばない。今までつながらなかった関係の人を結びつけることが可能。子どもや大人、さまざまな世代をつなげることができる。本が好きな人同士だけではない。

（委員）
・例えば蔵書数と学力の相関を示唆するような調査はいくつもある。しかし、家庭の蔵書数が増えれば良いというのことではない。言葉を選ばずに言えば、本を読むというのは、元来エリートの文化。啓蒙的な側面も孕んでいることは否めない。本が好きな人たちが、「本を読むことはいいことだ、皆さん集まってください」というだけでは閉鎖的な議論なってしまう。一部の人たちだけへのメッセージにならないようにしないといけない。
・そのためにも、本がもつ力を、いま一度言葉にしていくことは必要なこと。本を介して、まちをつくっていくとしたときの、本のある意味、そうしたネットワークの中心に位置する図書館の意味。それらを正面から議論するのは前向きなことだと思っている。

（委員長）
・図書館とはどういうものなのか、少し違う角度から、倫理的な側面にも触れながら話してみたい。
・まず図書館は誰もが自発的に使う施設。使いたくない人は使わないのが前提。
・また、図書館の蔵書とは、図書館に本を揃えることは、どういうことか。どういった本を置き、どのようにして市民に読んでもらえるようにするか、図書館が行うそうした選書自体に事実上の権力性が潜んでいる。来館者は自分の意志で本を選んでいるように見えて、選ばれている本から選んでいる。こうした公的な力によって、そこに置いておけば、継続的に存在し続けていくものとして、公共の図書館に、あるいは街中にどういった蔵書をもつべきかという議論は、まさに先ほどの蔵書構成の議論や本のあるまちづくりの方向性の議論と軌を一にするものだ。
・本のあるまちづくりは、多様な市民のアクセス動線の中に図書館を置く方向性をめざしていると言語化できる。図書館自体に入りづらく、蔵書にアクセスできなくなっていたが、例えば駅や複合施設に行ったついでとか、子育てイベントへの参加の途中にとか、より多様な動線上に本を置くことで、本にアクセスしやすくなるような状況をつくる。蔵書構成のこともそう。結局のところは図書館をどうやって市民の身近なところに置いていくのかにつながる議論だと思う。

□議題 2「その他」

（事務局）
・庄内よつば学園の地域開放について報告。
○プレオープン：令和 8 年 5 月 17 日（日）午前 10 時から午後 2 時まで　約 300 人の来場
協力：よつば公民分館、庄内公民館、しょうない REK
○毎週土曜日（約 3 時間）：会場のランチルームには壁に本棚を設置。
○夏休み期間中には学校図書館の地域開放も実施。初回の 7 月 18 日には約 30 名の参加。

（委員）

・4 ページの説明に使われている写真はランチルームでのお話会の様子である。学校図書館を開放している写真ではない。
・学校図書館を開放するのと、地域開放としてランチルームを開放しているのはきちんと分けて説明してほしい。
・当日参加したのは、庄内よつば学園の保護者と子どもたちだけだったのか。地域開放という言葉にすごく疑問を感じる。学校図書館を地域に開放するというが、具体的には誰に対して開放するのか。開放に関わる人たちがどのように対応するのか安全面も不安である。
・これから学校図書館の開放を増やしていくという話だが、公共図書館の代替として学校図書館を利用するという安易な方向にいかないでほしい。学校図書館は、こどもたちの学校教育を充実させるものと学校図書館法で定められている。豊中市の学校図書館には学校司書が配置され、学校教育に役立つ学校図書館を教職員や行政と共に整備してきた。

（事務局）
・安全面にはもちろん留意している。7/18 の参加者はほとんど全員、庄内よつば学園の子どもたちであった。ただ、庄内よつば学園の校区外だから入れないということはない。チラシなどは生徒を通してその家庭に配布しているので、主な対象は庄内よつば学園の在籍児童・生徒とその保護者と考えている。

（委員）
・庄内よつば学園は、外階段から学校図書館にすく上がってくことができる構造。どういった人が入っていくか、住所を書いてもらったりして確認はしないのか。

（事務局）
・入り口のところで確認はするが、入れない訳ではない。住所は書いてもらっていない。
・今後の学校建替え時などにおいても、外部からの動線を含め、学校図書館をどのように設計していくかはあたっては、安全面には十分留意していきたい。

（委員）
・市立図書館のところで学校図書館の取組みを書くのは違う。使命や理念がそれぞれにある。
・小さいころから豊中市に住んでいた。そのころはまだ学校図書館に学校司書はおらず、学校図書館も空いていないような状況だった。代わりに移動図書館でよく本を借りていた記憶がある。
・一時期、福岡の小学校に通ったことがあるが、そこでは学校図書館で本を借りることができ、公共図書館にも行っていた。高校の頃には、中央図書館である福岡市総合図書館が開館した。そこには、国際関係の活動を紹介するパンフレットやリーフレットなども数多く置かれており、図書だけではない多様な情報に触れることができた。館内では、子どもや高齢者、学習する学生など、さまざまな世代が利用していた。レファレンス機能も充実しており、新聞をはじめとする資料の種類や量も非常に豊富であった。これほど多様な資料や情報があることを知り、「もっと早い時期からこのような資料に出会えていたら、自分自身の関心や可能性も、もっと違う世界へ広がっていたのではないか」と感じたことを覚えている。特に子どもは、自ら図書館の蔵書構成や情報環境を選ぶことが難しく、身近な環境の中で「与えられたもの」から世界を知り、関心を広げていく側面がある。だからこそ、どのような資料を収集し、どのような情報との出会いを保障するのかは非常に重要である。それが公共図書館の役割ではないか。

・本がどうして重要なのかを伝えるのは難しいが、「子ども読書推進活動計画」では紙の本だけではなく、電子書籍をはじめとする多様なメディアも取り入れ、子どもたちがさまざまな形で情報や知識に触れることのできる環境づくりが示されている。同

計画は１８歳未満を対象としているが、豊中では１８歳以降は本だけになってしまうのか。「子ども読書推進活動計画」の流れも踏まえたうえで、本のあるまちづくりとの整合性を図っていく必要がある。

（事務局）
・私たちは普段から実務的な運用としては、学校図書館と公共図書館を一体で運用しているところがあって、特段の書き分けをしなかったが、今後は留意していきたい。
・蔵書は、計画性を持って行うべき時間のかかる取り組みだ。中央図書館の整備に向けては、どういう蔵書を構築していくか、早くから検討を進めている。副本をたくさん買うのではなく、いかに多様な資料をそろえるかに意識を変えている。今後、具体的にお示ししていきたい。

（委員）
・【資料１】12Ｐページのように、学校図書館と公共図書館の取組みを混合して記述してしまうと、どうしても学校図書館に公共図書館の機能の代替を期待しているような方向性に見えてしまう。それぞれの図書館が担う役割については整理が必要で、ここでは安易に一体化した記述は避けてほしい。

（委員）
・以前、意見交換会で、府立高校に学校司書が配置されなくなり、学校図書館の維持が難しくなっているので、公立図書館に助けを求めたいと府立高校の先生が発言していた。こうした切実な訴えにもかかわらず、図書館が対応した様子はない。また別のところでは留守家庭に本を配達してほしいという意見もあったが、いつの間にか消えてしまった。こうした人々が気軽に相談でき、足が向くような図書館であってほしい。
・公共図書館は、高校生の関心の高い本が少なく、足が向かないようになってしまっている気がする。螢池図書館も、駅前の好立地にありながら、蔵書構成から高校生の足が向かない状況である。
・図書館の PR は大切。もっと、図書館ががんばっているのもＰＲしていってほしい。

（委員）
・学校としては、地域との連携は必要であると考えており、その一環として学校図書館の開放も肯定的に捉えている。地域の方が学校にこられて、子どもたちと繋がりができることはとてもいいことだ。
・子どもたちにとっては、学校図書館から公共図書館へと利用の幅が拡がっていくことが望ましく、公共図書館をもっとうまく PR できればと思う。
・学校としても本のもつ力を分かってもらえるような取り組みができたらよい。

（委員長）
・学校図書館と公立図書館の区別に関しては、【資料１】５ページの図では、市立図書館が学校図書館と同じ枠で括られているが、これは同じ行政機関として連携がとりやすいという意味で括られているのだと思う。そのなかで市立図書館が中心的な役割を果たしていきたいという意識の表れだろうと思う。ただあまりに市立図書館のシステムのなかに埋没させてしまうと、やはり本来の学校図書館の使命と異なるといった意見が出てくるのも当然。留意した書き分けが必要。
・今の情報社会にあっては、大多数の人が検索エンジンやユーチューブを活用している。そこでは、市場利益に沿ったアルゴリズムによって、その人の視聴履歴に沿った情報（パーソナライズされた情報）が提供されている。結局のところ、今まで自分

が見たいものを見てきた結果として、巨大なＩＴプラットフォームから、「あなたはこれが好きでしょ」といった感じで、選択された情報を与えられている。不読率の高い高校生たちも、ユーチューブやＳＮＳなどはものすごく見ているはず。
・公共図書館の蔵書の権力性については先に触れたが、こうしたウェブ空間のアルゴリズムの論理とは別に、公共の論理として、あるいは図書館の論理として、図書館がもつ選書の権力性をどのように行使して、地域にどういった情報流通をめざすのか、地域の人々にどういった資料に触れてほしいとするのかを、みんなで議論していく良い機会でもあるのではないか。

（委員）
・私は、「本もあるまちづくり」をモットーに活動している。まちに様々なものがあって、「本もあればいい」という感じです。それだけ多様な情報環境のなかで生活しているなか、本の位置づけが多様になっていると思います。皆さんの意見を聞いていると、「本のあるまちづくり」の議論は結局のところ公共図書館の機能を減少させ、あるいは薄めることにつながるのではないかとの懸念があるように思う。私もそうした方向はいいことではないと思う。先ほど委員から「本である意味」や「図書館の意味」といった指摘があったが、関連することのように思うので、改めて確認したい。

（委員）
・日本の教育施策、図書館の読書振興施策の位置づけにおいて、さらには社会の情報流通のあり方が大きく変わる中で、本でなければならない理由が後退して、見えづらくなっているように感じている。本じゃないとだめだというメッセージを出すのはなぜなのか、誰なのかということが、今まさに問われている。
・「本で心を満たし、本を介してつながる」という言葉は、図書館を愛してくださっている方々へはもちろん、ちょっとだけ関心があるような方々も含め、多くの方々に機能しうるものだと私は思っている。豊中というまちが、本を通じて、もっとつながれるという理念を打ち出す意味がきっとあるはず。それをもっと具体的に言語化していくことが今問われている。本もあっていい程度の位置づけが一般的なものとなるなかで、あえてそこで積極的な打ち出しをするからには、何らかの具体的なメッセージを作っていかないといけない。
・先ほどの学校図書館の議論はかみあっていない。安全について配慮していると事務的に回答するのは大事だが、委員が質問していることの本質は事業の位置づけや意義についてだろう。繰り返し確認し、説明していかないと、市民に伝わるメッセージにはならない。こうした応答を積み重ねていくことが大事。

（委員）
・4 か月のあかちゃんに絵本をプレゼントする「絵本はじめまして」は長きにわたり続いてきた。文字通り、いちばん最初の「本のあるまちづくり」の実践だと思う。絵本に興味ない保護者もおられるが、「絵本をおもちゃのひとつと思って、お子さんにいっぱい声をかけてあげて」と言って絵本を渡している。絵本を読んでもらっているあかちゃんがうれしそうな顔をすると、保護者の方も喜んでいる様子がわかる。
・この資料にも、ぜひ「絵本はじめまして」のことを載せておいてほしい。

（委員長）
・この「ブックスタート」はイギリス発祥だが、イギリスでは言語習得のための早期教育という位置づけだったが、日本にもってくるときには、あえてこうした位置づけにこだわらず、親子で楽しい時間を共有する理念を重視し、今に至っている。今回の議論の方向性にも合致する。

（委員長）

・これで令和８年度第１回図書館協議会を閉会します。